

バンコクに滞在する越日カップルの ベトナム語継承実践 —「子ども部屋時代¹」への移行期のなかで—

中川 康弘

1. はじめに

2006 年度末法務省入国管理局統計によると、日本在留のベトナム人数は 32,485 人。そのうち日本人の配偶者等資格の者は 1,431 人となっている。だがこれら越日カップルの子どもに対するベトナム語継承を考えると、数の少なさのみならず周囲の価値観や主要言語（日本語）との社会的格差などが影響し（Wong Fillmore 1991、中島 2003 等）、その環境が整っているとは言いがたい状況にある。将来的課題として母語を保持、支援する社会体制の整備等も考えるべきとの議論もあるが、現時点では、家庭によって左右されるのが実状である。

2. 研究の背景

二言語維持のためには、親の役割意識と意思決定が重視され、学習言語への移行期にも就学前に家庭で習得した知識、技能が重要だと言われている（カミンズ 2006、西原 2007）。家庭における母語保持について述べた代表的な実証研究である朱（2003）は、韓国人児童への質問紙調査と母語力テストの結果から、読み聞かせや文字学習など家庭内での母語使用が母語保持、育成に効果があるとし、会話力テストによる調査を行った朱（2005）でも、家庭での努力が母語保持・育成に最も関係あると結論付けている。これらの指摘、結果は、母語保持、育成には家庭での実践がいかに大切かを物語っていると言えるだろう。

Yamamoto（2001）は、言語併用発達に与える要因の一つに家族的要因を挙げ、兄弟の有無、家族の移動の頻度、親類との交流が子どもの言語発達に関わるとしているが、人の移動が世界規模で起こっている近年、家族の移動というステージに遭遇した国際結婚カップルを扱うことは意義のあるものだと考える。

3. 研究の目的

そこで本発表では、仕事の都合でバンコクに一時滞在する越日カップルに焦点を当て、本調査時点で 2 歳 10 か月という子ども部屋時代を迎えた子どもに対し、カップルがタイのバンコクという環境にお

いてどう母語継承を実践しているのかに着目した。具体的には、バンコクへの移動と子どもの成長が、中川（2006）で見られた調査結果（子どもへのベトナム語使用の徹底、帰属意識・多言語意識育成の働きかけ、ネットワークを活用した日本でのベトナム語環境作り）にどう影響をもたらすか、①維持・促進した点と、②抑制・変化した点、を追った縦断的調査報告として本発表を位置づける。

4. 調査協力者と調査方法

協力者は、ベトナム人女性 VA とその日本人配偶者 JA。両者とも 30 代前半で、VA さんは主婦、JA さんは日本の公的機関に勤務している。JA さんとベトナムで知り合った VA さんは、2002 年に結婚、来日。2004 年 10 月に VJ 君が生まれ、JA さんの転勤に伴い 2006 年 8 月よりタイのバンコクに住んでいる。VA さんの現在の主な家庭内言語は、夫の JA さんとは日本語、VJ 君とは日本語、ベトナム語を使用している。

筆者は 2007 年 7 月末に 5 日間ほどバンコクに赴き、VA さん一家と行動を共にした。調査はその際の参与観察と、滞在最終日に VA さん、JA さん同席のもと約 3 時間行ったインタビューが主である。後日参与観察メモと、インタビューの音声データの部分的文字化を行い分析資料とした。また補足事項は後日メールで確認した。以下、データは斜体、データ中のベトナム語の日本語訳は{ }で示す。

5. 調査結果

5.1 維持・促進した点

前回調査において、2 人は読み書きの習得は家庭での努力が不可欠であることを十分認識していた。今回の調査でも同様、日常的に両言語の絵本を使用し読み聞かせを続け、壁に日越英対照の子ども向け教材も貼り、文字の認知、語彙の増加に努めていたことが確認されている。

また参与観察では、VJ 君が伝えたいことは必ず文単位で言わせ、言葉による意思表示を徹底していることも確認された。以下は日本語でのやりとりの参与観察データである。

(参与観察データ1：食事中の会話で)

VJ：お母さん、水。

VA：えっ、ご飯ほしいの？

VJ：ちがう。

VA：何？おしっこ？

この他、散歩の時に歌を歌いあったり、VAさんがベトナムに電話をした際はVJ君を呼び、ベトナムの童謡を歌わせていたりすることも見られた。

次に帰属意識については、VJ君が両国に属しているという自らのルーツを認識しはじめているエピソードが確認された。

(インタビューデータ1：帰属意識の認知)

VA：今日お父さん(JAさん)帰ってこない、仕事でベトナム行ってらんですよって言っても、VJ、僕もお父さん見たい、ベトナムおばあちゃんとおじいちゃん会いたいって。だから、(VJは)おばあちゃんとおじいちゃんベトナムいる、ベトナムって言ったらわかってるんですよ、私びっくり。

タイはベトナムまで飛行機で約2時間。どちらも東南アジアということもあり、気候や食文化などは似ている面もある。またバンコク市内は外国人も多いことから、多言語意識も育みやすい環境にあるといえる。以下、多文化に接している例として、参与観察データ2でタイの社会文化経験、データ3で英語話者の子どもとのやりとりを挙げる。

(参与観察データ2：バスターミナルで)

VJの行動：朝、直立不動で王様の歌を聴く。

(参与観察データ3：

ニュージーランド(NZ)人の子どもと)

VA：そろそろ帰りましょう。

NZ：Don't go home.

VA：OK, OK.

5.2 変化・抑制した点

日本にいる時と異なる点は、VAさんがVJ君に話しかける言葉に日本語が増えたことである。前回調査では、VJ君とのパーソナルな会話のみならず、その中に第3者の日本人がいる場合でもベトナム語使用を徹底していた。今回の参与観察では、2人だけの時も両言語併用するか、日本語でのみ話しかけていることが多く見られた。以下にデータを記す。

(参与観察データ4：食事中の会話で)

VA：Đũa háu? すいか食べて。

VJ：これĐũa háuじゃない、すいか。

ベトナム語の産出は、VAさんから働きかけたフレーズでの使用に限られていた。

(参与観察データ5：時計を壊した後で)

VA：VJ、Xin lỗi{ごめんなさい}は？

Xin lỗi 言いなさい。

VJ：Xin lỗi...

(参与観察データ6：だっこしてほしい時)

VA：だっこ? じゃあ、Nói yêu mẹ đi! {「お母さん愛してる」って言って!}

VJ：Con yêu mẹ{お母さん愛してる}、だっこ。赤ちゃんになりたいよ。

日本語でのやりとりが増加したことについて、VAさんは、以下のように述べている。

(インタビューデータ2：日本語増加の理由)

VA：最初の頃はベトナム語、2人の会話はベトナム語多かったですけど、だんだん考えて、小学校の時なったら日本の学校行ってほしいから、今日本語使って。

この日本語の増加は、VAさん自身の読み書きにも影響していた。バンコクに来て以来、VAさんは日本語を読む機会が減ったと自ら感じ、主に夜、VJ君が寝てJAさんが帰宅するまでの時間に日本語サイトを多く見るそうだ。

また、双方の家族、特に祖父母に触れる機会が少ないことからくる両言語の接触機会の喪失もバンコク滞在のデメリットとして感じていた。

(インタビューデータ3：祖父母に触れる機会)

VA：やっぱりおじいちゃんおばあちゃんが周りにいてほしい。あたしは小さい時も親戚とかから歌とか昔話とか聞いたから。

JA：そう。今は自分が教える前に保育園で歌覚えてくるんですよ。これじゃまずいと。

そして将来的なベトナム語継承について、前回調査では、日本でのベトナム語ネットワークを活用してベトナム語継承を試みようとしていたが、今回は、以下のように述べていた。

(インタビューデータ4：ベトナム語継承の計画)

VA：半年か一年ぐらい(ベトナムに)行かせようと思って、今、最低限覚えてもらって。

JA：そうですね、できたら来年あたりに半年でも。

VA：そう。で、その後日本一回戻って小学校入るの準備して、で小学校終わって中学生か高校生

ぐらい時にもう一回長くベトナムの学校に。

ベトナムに帰国させることで身につけさせようとした理由は、以下に記す補足メールで確認された。

(一時帰国によるベトナム語継承を考えた要因：

2007年9月28日 JAさんからのメール受信)

日本がベトナム語を育てにくい環境であるの言うまでもありません。多言語で、他国と接し共存していることを実感できるバンコクに来て、8倍ぐらい育てにくい気がしました。

そして2人は、母語継承に対する態度として、あくまで親の意識の問題としながらも、ベトナム語を継承するに十分な環境とは言えない日本での現状について、次のような意識を持っていた。

(母語継承支援についての2人の意見：

2007年9月28日 JAさんからのメール受信)

言語継承については家庭内の意識の問題だと思います。国(公)が行うべきは、言語継承しやすい制度や法律を作るのではなく、日本人一人一人が欧米以外の諸国、諸文化を尊重する気持ちを促進してくれるような「心の面」でのサポートだと思います。

6. 考察

まず、バンコクにおいて維持・促進した点で、言語継承については、両言語の読み聞かせによる文字語彙の認知、言葉による意思表示の徹底など、前回同様に両言語の知識、表現力を育ませようとする姿勢が見えた。このことは「家庭で習得した知識や技能は母語から学校言語へ転移する」というカミンズ(2006)の主張を順調に推し進め、学習言語の下地作りになっていることがわかる。

また帰属意識と多言語意識についても、VJ君の中に育成されている様子が見られた。これは、バンコクという都市を持つ多言語環境によるところが大きく、家族の移動がプラスに作用した結果だと言える。

だが、この移動により変化・抑制した点には、まず、VAさんとVJ君のやりとりが、ベトナム語使用機会の少ない日本という環境ゆえ1歳のVJ君にはベトナム語使用を徹底していた前回調査に比べ、現在はバンコクという環境ゆえ、日本語に触れさせようと努めていたことが挙げられる。その要因としては、1) 日本に戻った後の生活を考えていること、2) VAさん自身の日本語力の維持、3) 両親との接触の少なさ、の3点が挙げられ、今はベトナム語ではなく日本語を重視する方針をとっていた。このことから、親のどちらかの国ではないという環境が言語継承を抑制させていることがわかり、家族の移動

による言語継承の継続の難しさが改めて示された。

そしてベトナム語継承については、2人は現状ではベトナムへの一時帰国という手段を考えていた。帰国による実践を選択したことは、バンコクへの移動によって、バンコクという多言語環境と日本を相対化し、日本でのベトナム語継承実践の難しさに改めて気づいた過程が、一時帰国によるベトナム語継承を考えた要因を述べたメールから読み取れる。

ただここで、バンコクにおいて2人が日本での実践の難しさを相対化し、結局、一時帰国という継承実践の手段を考えざるを得なかったという点は無視できない。親の意識が徹底していなければ、一時帰国という手段も考えることができないかみならず、本来ならば、日本においても何の障壁もなく実践できることが理想の形だからである。2人は、母語継承支援についてのメールで、受入れ社会である日本には、欧米以外の文化への尊重等、日本人一人一人への啓蒙の必要性を指摘していた。このことから、VAさんたちのような「実践当事者への支援」よりも、むしろマイノリティ言語文化の理解者を育てていくための「受け入れる日本人側への支援」が求められるといえる。よって、母語教育に携わる者は、形だけの制度や政策に留まらない、母語継承実践の当事者の心情に立ちつつ、多くの日本人に対して、さまざまな場、形で、母語を重視する教育、意識改革の働きかけをしていくといったサポートのあり方が示唆された。

7. おわりに

以上、1組の越日カップルのバンコクにおけるベトナム語継承実践の過程を紹介した。このカップルの行方を追いつつ、今後は成長に伴い獲得される子どもの言語能力、言語継承に対する意識、さらには親の継承実践に対する意識にも着目し、引き続き調査していくことを課題としたい。

注

¹中島和子(1998)17-32 参照。語彙が増え、言葉による感情表現、思考を学ぶ2-4歳がこの時期にあたる。

参考文献

- カミンズ, J. (2006)「学校における言語の多様性—すべての児童生徒が学校で成功するための支援—」第6回 MHB教育研究会配布資料(中島和子・湯川笑子訳)。
朱晧淑(2003)「日本語を母語としない児童の母語力と家庭における母語保持—公立小学校に通う韓国人児童を中心に—」『言語文化と日本語教育』26、14-26。
朱晧淑(2005)「外国人児童の母語保持・育成に関わる要因—会話力テストの結果から—」『言語文化と日本語教育』30、11-20。
中川康弘(2006)「言語形成期前期にある子供への母語継

- 承実践に関する一考察—ある日本・ベトナムカップルの事例から」『2006年日本語教育学会春季大会予稿集』。
- 中島和子（1998）『バイリンガル教育の方法 12歳までに親と教師ができること』アルク。
- 中島和子（2003）「JHLの枠組みと課題—JSL/JFLとどう違うか」MHB教育研究会。
- 西原鈴子（2007）「バイカルチュラル家族の子ども—言語獲得と言語運用—」『異文化間教育』26号、異文化間教育学会、54-60。
- Wong Fillmore, L. (1991) When learning a second language means losing the first. *Early Childhood Research Quarterly*, 6, 323-346.
- Yamamoto, M. (2001) Language Use in Interlingual Families: A Japanese-English Sociolinguistic Study. Clevedon: *Multilingual Matters*.

なかがわ やすひろ／神田外語大学留学生別科